



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ペーター・ビクセルの：何も伝達しないコミュニケーションの試み
Author(s)	中川, 勝昭; NAKAGAWA, Katsuaki
Citation	独語独文学科研究年報, 18, 29-43
Issue Date	1992-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25844
Type	departmental bulletin paper
File Information	18_P29-43.pdf



ペーター・ビクセルの〈Milchmannesgeschichten〉

— 何も伝達しないコミュニケーションの試み —

中川勝昭

0. 序

ペーター・ビクセルは、1935年スイスのルーツェルンで生まれた。小学校教師に在任中の1964年に、短編集 „Eigentlich möchte Frau Blum den Milchmann kennenlernen“、通称〈Milchmannesgeschichten〉を出版し、作家として認められる。それ以前に彼が自費出版し、現在では入手不可能となっている二作を除けば¹⁾、これが彼の実質的なデビュー作である。1965年——出版自体はその二年後——、二作目の „Die Jahreszeiten“ の中の一章に対して47年グループより表彰を受け、作家としての地位を確立する。

本人が ‚Wenigschreiber‘ を自称しているように²⁾、彼は寡作の作家であり、これまでのところ所謂「文学作品」と呼べるものは、薄っぺらな単行本が四冊出版されているだけである。しかし、エッセイ集・コラム集としてまとめられている、文学という領域を越えた社会一般の問題についての夥しい数の発言や、議員の相談役を務めるほどの積極的な政治参加の態度が、作家としての彼のスイスにおける重要さを生み出しているものと思われる。彼についての評伝は、これまでたった一冊出されているだけであるが、評伝の著者はその冒頭で、「彼はスイスのNo.2だろうか」という問いが立てられるほど、ビクセルはスイスでは重要な作家であることに注意を喚起している³⁾。これは勿論、F・デュレンマットとM・フリッシュの存命中のことであり、この問いにおいては両者共にNo.1として扱われているから、両者が相次いで逝ってしまった現在では、当然ながら問いの形式も改められなければならないだろう。

彼の「文学作品」中、最もポピュラーなものとしては、つまり彼の名前と常に結び付いて思い出される作品としては、彼のデビュー作と寓話風の物語である „Kindergeschichten“ を挙げることができる。従来、ビクセルは、デビュー作の〈Milchmannesgeschichten〉において、小市民の取るに足りない日常生活に対して最も適切な言語表現を与えたとされてきた⁴⁾。小市民の日常性という題材は、文学にとっては目新しいものではなく⁵⁾、ましてビクセルが初めて開拓した題材というわけでもな

い。しかし、彼は、彼以前の誰も成功しなかったこと、つまり、そもそも語るに値しないこの題材を、ことさら悲哀を込めたり、パロディー化したり、あるいは上から見下ろすような心理分析を加えたりせずに、対象に即した形でそのまま提示することに成功しているというのである。

本稿では、彼のデビュー作についてのこうした従来の解釈を再検討し、彼があるエッセイで明らかにしている彼の文学観に基づいて、解釈の新たな可能性を探ってみたい。

1. 小市民の日常性の表現

確かに、この二十一の短編の大部分において扱われているのは、大きな野心もなく、漠然とした満たされない思いを抱きながら、昨日がそうであったように、そして恐らく明日もそうであるように、毎日の習慣を汲々として果たしていくだけの人々である。だから、そこに登場するのは、お互い上の空でとりとめのない言葉を交わしたり、小言を言ったりする中年を過ぎた夫婦 („Sein Abend“)、毎日12時になると役所の建物から出て、昼飯を食いに急ぐ公務員たち („Die Beamten“)、教会の合唱隊の練習に行っている妻を所在無く待っている夫 („San Salvador“)、毎日同じ席に座って、黙って人のやっているトランプを眺めている飲み屋の常連客 („Das Kartenspiel“) 等である。その意味で、この短編集で扱われている人物たちというのは、どこにでもいるような誰か、それも決して人目に付くことのないような誰かに限定されている。しかし、主人公である彼らが、その小市民的な心理を解剖するために作品の中に取り上げられているのかというと、必ずしもそういうわけではない。というのは、これらの登場人物たちの精密な性格描写が全く欠如しているからである。短編というジャンルによく見られるように、日常生活の中の何気ない一コマをスナップ・ショット風に捉えて、その瞬間に垣間見られた登場人物の性格を深く抉り出すといった手法も取られていない。だから、むしろ作品の重点は、登場人物の一人一人にあるというよりは、彼らの生活の日常性そのものにあるかのようだ。

小市民の日常性を題材とするなら、勿論、登場人物の選択の範囲を制限しただけでは不十分なわけで、上に挙げたような人物たちが、日常性を逸脱した物語を形成する可能性は幾らでもある。そのため、著者は、通常であれば物語を構成するのに欠かせない、所謂「出来事」が何一つ起こらないように細心の注意を払っているようである。そうした用心深さは、例えば、登場人物相互の会話が決して噛み合うことがないという点や、「待つ」こと以外には具体的な行為がほとんど何も行われることがないという点などに窺うことができる⁶⁾。つまり、これらの特徴は、作品に何らかのドラマチックな葛藤が生起する余地を全く与えないための著者の苦心の現れと見ることができる。例えば、„Blumen“ や „Sein Abend“ では、ある登場人物が発した問いが相手に答えられずに終わったり、意味上のつながりが明らかでない解答が与えられたりするが、それは作品の中で互いの会話や関係がそれ以上発展していくことを妨げている。更に、厳密には会話ではないが、牛乳配達と主婦の間のメモのや

りとりが親密さを持ち始める手前で途絶えてしまう „Der Milchmann“ にも、出来事を生じさせないための意図が見て取れる。また、作品の中で登場人物が行為らしい行為をほとんど行わないのは、全編に共通した特徴といえるが、その中でも「待つ」こと自体が筋の展開の代わりとなって作品の骨組みを形作っていると考えられるものとしては、„Die Männer“ や „Die Tochter“ を挙げるができる。その他に、„San Salvador“ では、妻を待っている所在のない夫が描かれているが、ここでは、待っていた妻が帰ってきたところで作品が終わり、本来ならそこから何か物語が始まるはずの瞬間で作品が途切れてしまっている。

これは既に指摘されていることだが、この短編集のどのテキストもテーマの一貫性に基づいて構成されているのではなく、語り手の展開する連想がそのままテキストの構造となっている (Prinzip der assoziativen Reihung)<7>。だから、前段で挙げた様々な特徴は、それぞれのテキストが予め与えられたテーマを表現または再現するために書かれているのではないという、テキストの成立過程の事情とも深く関わっている。物語を構成し得るようなテーマがテキストそのものに先行してあるのではなく、語り手の比較的自由的な連想に従ってテキストが展開していく、それも、何らかの物語が生起するのを避けながら。この短編集の表題作である „Der Milchmann“ がどのような創作過程を経ていくかは、よく知られている<8>。まず、この作品の冒頭の一句、「牛乳配達紙切れに書いた。『今日は残念ながらもうバターはありません』」がビクセルに取り付き、そこから連想が発展していった作品が生まれたという。一般に、この作品集のどのテキストについても言えることだが、語り手の連想が、ある対象なり語なりに対する、何の変哲もない常套的反應や慣習化した連想から始まり、今度はその反應や連想がまた別の常套的反應を触発するという具合に進んでゆく。そのため、語り手はある対象についての、読者より優れた洞察を提示するということがない。そのうえ、語り手の視線が最初に与えられる対象に繋ぎ止められていないために、全ての連想がそこに収斂していくということもなく、テキスト全体の構成は大変緩やかなものになっている。通常であれば、テキストには求心力をもったテーマが存在していて、それを巡って陳述が繰り広げられていくものだが、この短編集のどのテキストにもそうした中心となるテーマを特定することができない。そこには、ぜいぜい強い拘束力を持たない「話題 (Gesprächsstoff)」と呼べるようなものが認められるだ。

しかし、こうした作品構成上の特徴が、なぜ日常性的的確な表現と受け取られるのだろうか。フロベールは、彼の「ボヴァリー夫人」において、新聞の三面記事に頻出するようなありきたりの出来事を取り上げることで、扱うテーマをゼロに近づけ、題材の新奇さによってではなく、文体の力だけで支えられているような小説を書こうと試みたと言われている。同一の対象についての記述が個人によって千差万別であるように、言語とは、それが指示する対象について何らかの情報を提供してくれるばかりでなく、常にその発信者の観点をも明かしてしまうものである。どんな言語使用も、内容相 (Inhaltsaspekt) と関係相 (Beziehungsaspekt) を含んでいる。「内容相はデータを伝え、関係相は、

そのデータがどの様に捉えられているかを示す。」〈9〉だから、たとえ題材が無価値であっても、文体が卓越したものになればなるほど、内容は膨らんでいき、題材本来の見すばらしい原形をとどめない姿になってしまうこともある。「ボヴァリー夫人」の場合、外科医のメスに比較される精緻な心理分析が、ありきたりの題材を文学史上の傑作に変貌させてしまった。つまり、フロベールの文体の関係相が豊かであったために、その貧しい内容相を補って余りあったということだろう。しかし、逆に言うと、そこでは、ありきたりの題材の「ありきたりさ」が、出来上がった作品においては失われてしまっている。フロベールにとってテーマがゼロである必要があったのは、出発点においてだけで、物語を構成する事件や人物たちの分析が押し進められるうちに、ゼロの持つ空虚さまでが、それには似つかわしくない光で照らし出されてしまう。無意味さを無意味なままに表現する事は、フロベールの場合、問題ではないのである。

「ボヴァリー夫人」の例は、ビクセルの作品を解明する上で、一条の光を投げ掛けてくれる。つまり、日常性の説得力のある表現を作りたければ、テーマが日常生活の中から取られているということばかりではなく、それを処理する書き手の観点までも日常的なものでなければならないということだ。精密な分析こそが対象を正確に捉えることができるという常識は、ここでは当てはまらず、かえって当の対象を取り逃がしてしまう。この短編集の場合、語り手によって示されるのは、ある語なり対象なりについてのクリシェー化した判断ばかりで、その意味で、彼の観点は、我々が日常持っているそれと何ら変わらないものである。そして、陳述の対象となるテーマが特定できないというこの短編集の特徴は、その日常性の表現として説得力をさらに強めている。

一般に、我々の日常生活においては、思考のエコノミーが働いていて、我々が出会う一つ一つの事柄について逐一反省が加えられたりすることはない。我々は身についた習慣に従って半ば盲目的に生き、日常の個々の事象に対しても同様に、習慣的な反応で済ましてしまうものなのだ。だから、小説においてそうであるように、自分の住んでいる世界の隅々までが因果的説明によって解明され尽くしているわけではないし、また、一つの対象を首尾一貫した態度で執拗に分析するという行為も、そもそも日常性とは異質なものなのだ。したがって、語られている事柄に対する常套的で皮相な反応や、叙述の一貫性のなさこそが、ビクセルの作品に日常性の外観を与えているのである。フロベールは取るに足りない出来事を取り上げながらも、それを鋭い観察眼で解剖し、一連の因果関係によって結び合わされた一貫した出来事に作り変えてしまう。そのため、かえって対象が当初もっていた「ありきたりさ」が失われてしまった。尤も、彼の場合には、それが望むところであったわけだが。

狭い意味での文体上の特徴にも、限定された語り手の観点が反映している。ここでのビクセルの文体は、もはやそれを「文学」と呼ぶのさえ憚られるような稚拙なものである。どのテキストも、ほとんど単文だけで構成されている。そのうえ、接続詞もあまり使用されず、多くの場合、単文がただ単に並列的に書き連ねられているだけである。文相互の意味上の因果関係が明示されていないために、

場合によっては何のつながりもないバラバラの文が寄せ集められただけという印象を与えることもある。また、これらのテキストは、比喩のような、文学的言語に特徴的な表現手段とも無縁である。つまり、文体だけを見るならば、小学生が書いた作文と何ら変わりがないとさえ言うことができる。実際、彼の文体が無能力の証と取り違えられかねない危険を孕んでいることは<10>、度々言及されてきた。

2. ビクセルの文学観

上で行った、この短編集の諸特性の検討は、従来の解釈の正しさをより一層強調こそすれ、疑問に付するような理由を与えてはくれなかった。つまり、テキストに現れているものだけを見ている限りでは、従来の解釈は反駁のしようのないものだ。テキストの中では実際に小市民達が扱われ、文体的な効果も彼らの日常性を正確に写し取ったものとなっている。しかし、こうした、字面に現れた意味の総和をもって作品の近似値とする解釈は、実は、そもそもビクセル自身の文学観・言語観と相入れないものなのである。

作品を創作する際の彼の文章作法とも言えるエッセイの中で、彼は文学をどのようなものと考えているかを明らかにしている<11>。このエッセイが展開している文学についての、断片的だが、彼の創作にとっては本質的な思索の契機となっているのは、ある酔っぱらいのおしゃべりである。

ビクセルは、ある酒場で一人の酔っぱらいにまわりつかれる。その男は、アイスホッケーのナショナル・チームについて、選手ひとりひとりを取り上げてくださと不平を述べていく。ところが、その面白くもない、酔っぱらいのおしゃべりに、次第に、切れぎれの個人的な情報が混じるようになる。それらの断片を集めて総合すると、およそ次のような事情らしいことがわかる。この男は、三日前に貰ったばかりの給料をすべて飲み干してしまい、その日家族のもとへ帰らなければならないのに、恥ずかしくて帰るに帰れないというジレンマに陥っているのである。ビクセルは、この酔っぱらいのおしゃべりに、いわば文学の萌芽的な形態を見る。つまり、この男は、自分の困窮した状態から生じた表出の欲求を、直接に語ることでできないそのジレンマとは縁もゆかりもない、アイスホッケー・チームについての不平を述べることで、満たそうとしているのである。この場合、アイスホッケーという話題はそれ自体、何の重要性も持たず、コミュニケーションを確保するための口実に過ぎない。ビクセルの考える「文学」にとっても同様に、字面に直接現れている内容は二義的なものでしかなく、それを語ることで別の何かを表出するほうが重要なのである。

ある事柄を書き、それによって何か第二の事柄を表すということの内には、(なぜかは分からないが、この第二の事柄を、むしろ第三の事柄と呼びたい気がする) 何か文学的なところがある。

あの酔っぱらいは、自らの悲惨さを表出 (Veräußerung) するためにアイスホッケーを下敷きにすることで、意識せずに文学の創作のようなことをやっているのである。(S.407)<12>

だから、ビクセルは、何の情報価値も持たない、近所の人のお天気についての会話のような、ただ言葉を交わすことだけにしか意味がない日常のコミュニケーションにも、「文学」とのある種の類似性を認めている<13>。

こうしたビクセルの文学観を、彼自身の作品を解釈するための指針として、積極的に取り入れようと試みているのは、これまでのところナイハウスただ一人である<14>。彼が解釈を試みているのは、<Milchmannsgeschichten> の巻末に置かれている „Erklärung“ という短編である<15>。このごく短い小品では、朝に雪が積もっていたことをきっかけとして、日々の生活に忙殺されている人々が一般に雪について懐くであろう感想が、語り手の口を通して語られる。雪でかまくらや雪だるまを作って楽しむのだから、雪が積もったことを喜ぶこともできただろうが、結局のところ、雪というものは歩行や交通の妨げになるだけだというのがそれである。ナイハウスは勿論、雪の話題自体は重要ではなく、それとは別のことを語るための口実として使われている過ぎないと考える。そして、ビクセルは、雪についての社会の常套的判断を提示することで、いかに人間は習慣化した思考パターンに囚われているかに注意を促し、自らはそうした思考習慣から脱出することを宣言 („Erklärung“) しているというのである<16>。しかし、このわずか数行の短編が、この短編集の範囲を越えてビクセル自身の創作活動全体にまで拘束力を持たずにはいないような重大な宣言を内に蔵しているとは、考えにくい。それに、そもそも、外見上は別の題材を扱い、宣言の内容自体はその背後に隠すという方法は、「宣言」という言語行為の性質を考えた場合、適切さを欠いているように思われる。

ナイハウスの解釈に見られる不自然さは、„Erklärung“ という題に惑わされて、ビクセル自身の何かの宣言を読み取ろうとしていることばかりではなく、テキストの表層の題材とは別途に込められているはずの意味を無理に捜し出そうとしているところからも来ているのである。与えられた題材はいつも語るための口実に過ぎないというビクセルの主張を、解釈に援用したまではよかったが、ナイハウスは、その主張のどこに重点が置かれているかを理解できていないために、こうした無理な解釈に陥ってしまったものと思われる。上記の酔っぱらいの例がビクセルの興味を引いたのは、それが、語られた内容の背後に隠された本当の意味をのぞかせたからではなく、語られる内容ではなく語る行為そのものが目的となっていたからである。陳述すべき、あるいは伝達すべき事柄のためにコミュニケーションが行われたのではなく、自己を表出するためだけに行われたからである。ビクセルは、この酔っぱらいのおしゃべりの内に、純化されたコミュニケーションの可能性を見て取っている。

酔っぱらいの話は、ほとんど何の情報価値ももっていない、その目的は情報ではなく、コミュニケ

ーションなのだ。(S.407)

彼の関心が、こうした「コミュニケーションのためのコミュニケーション」にあることは、彼がエッセイの中で挙げている他の例によっても暗示されている。それは、隣人と交わす天気についての会話であり、恋人に書く手紙である<17>。恋人宛の手紙も、それが相手の手に届いて読まれさえすればいいのであって、そこに書かれている内容自体は二義的な意味しか持たない。内容は、文面が短くなり過ぎない程度に、そこにありさえすればいい。

言語学においては、言語が単に何らかのメッセージを伝達するという機能を持つだけでなく、その伝達の回路を自ら確保をする機能も持っていることは、既に指摘されている。ヤーコブソンは、言語伝達を構成する最も基本的な要因として、発信者・受信者・メッセージ・コンテキスト・コード・接触の六つを挙げているが、その内の接触とは、言語伝達が可能となるための、「発信者と受信者との間の物理的回路・心理的連結」<18>のことである。そして、この接触という要因に対応した機能、つまり、対話者との接触を確保する機能は、交話的機能と呼ばれている<19>。この機能は例えば、回路が働いているかどうかを確認したり（「もしもし、聞こえますか。」）、相手の注意の持続を確認したりするものである（「ねえ、聞いてるんですか。」）。それはまた、「儀礼化したあいさつのおびたしいやりとり」、「会話をひきのばすことを唯一の目的とするだらだらした対話」などに特に顕著に現れる<20>。ビクセルの考えている文学とは、この交話的機能が支配的な言語活動の、一つの変種と見ることが出来る。ヤーコブソンの場合、交話的機能が、一見、言語の持つ自律的な機能の一つとして扱われているかのように見えるが、それは結局、「回路の確保」と見做されていることから分かるように、メッセージ伝達という最終目的に従属した下位機能としてしか見られていない。しかし、ビクセルは、接触そのものを自律的な目的と考え、情報を伝達するという合目的活動からは独立したものとして扱っている。こうした彼の言語観は、表現こそ異なってはいるが、他の場所にも現れている。彼がフランクフルトで行った、文学についての講演では、「話す (sprechen)」行為、「語る (erzählen)」行為の、その内容からの自律性・先行性が再三強調されている<21>。彼は、そこでも、人間が話したり語ったりするのは、伝えるべき内容が予め与えられているからとは限らないという主張を繰り返している。先に話したり語ったりする欲求や必要があって、それを満たすために後から話題が見つけ出されることもあるというのである。

こうした観点から見ると、既に引用したエッセイからの一文も、より精確な理解が可能となるだろう。

ある事柄を書き、それによって何か第二の事柄を表すということの内には、（なぜかは分からないが、この第二の事柄を、むしろ第三の事柄と呼びたい気がする）何か文学的などころがある。

(S.407)

ビクセル自身、明確に言語化できていないが、彼がここで第二の事柄を第三の事柄と呼びたいと考えているのは、第二項として表出行為そのものが彼の念頭にあったからではあるまいか。コミュニケーション（表出行為）を行うためには、その内容が何であれ、嫌でも何か（ある事柄）について語らなければならないが、その表出行為の直接の心理的動因（第三の事柄）が具体的に明らかになるかどうかは、付帯的なことにすぎない。ビクセルにとっての主な興味とは、表出の欲求を満たすために全く偶然的な話題が口実として使われることにあるのであって、話し手を表出へと駆り立てた直接の原因が明らかにされることにあるのではない。

陳述内容 [Inhalt] (アイスホッケー) と表出内容 [Aussage] (ジレンマ) は、ここでは、したがって、多かれ少なかれ偶然に結びついたのである。酔っぱらいの話は、ほとんど何の情報価値ももっていない、その目的は情報ではなく、コミュニケーションなのだ。(S.407)

これも、既に一部引用した文だが、酔っぱらいのジレンマを、'Aussage' として、それが伝達されるべき真の内容であったかのような誤解を招きやすい言葉遣いの間隙から、情報伝達から独立したコミュニケーション行為を強調する声が聞こえてきている。

しかし、一つ疑問が残る。ビクセルにとっての文学が、本当に情報伝達ではなく、コミュニケーションを図ることだけを目的とするものであるならば、なぜわざわざ文学を創作するために努力する必要があるのか。お天気のことであろうと、近所の噂話であろうと、どんな内容でも相手と話をすることができれば、コミュニケーションという目的は達成される以上、文学の存在理由は全くないことになる。それらの話題とビクセルが考える文学との差はいったいどこにあるのだろうか。こうした問いに対する解答は、これまで参照してきたエッセイの中には、直接的な形では与えられていない。それに答えるためには、周到な反省を経ないまま書き下ろされたこの断片的な文章を解きほぐし、そこで絡まり合っている少なくとも二つの内的な要請を、別々に選り分けて取り出す必要がある。

彼はまず、言葉というものが、それを使用する主体の支配に完全に服してしまうのではなく、主体が制御しきれずに、言葉自らが自分の力を揮う場合があることに気付いている。それは、ある時には個人的な無意識という形で現れる。例えば、何かの専門書のような、情報を客観的に伝達することだけを目的とした書物でさえ、必要最小限の言葉だけで書かれているのではない。著者の意図の中に、知らずに「うまく書きたい」という欲求が紛れ込んだりするために、不必要な修飾の言葉などが幾つも入っていたりする。また、そこに使われている一つ一つの語の選択のすべてに、著者の意識が完全に行き届いているというわけでもない。「類義の表現が幾つかある中で、なぜあれではなくこれを選

択したのか。」といった問いのすべてに対して、明快に説明できる著者など存在しないだろう。

言語によって、もっぱら、念頭にある対象や出来事だけを伝達することはできない。誰でも、意図せずに何か個人的なものまで同時に伝達してしまう。(S.408)

また、ある時には、それは、言語の中に刻み込まれた慣習的な思考パターン、つまり社会的な無意識であることもある。

言語はいつも、我々自身がするよりも多くのことをしようとするようだ。そして、我々が知っているどんなことでも、言語はそれについて更に何か余分なことを知っているようだ。言語は、我々が支配しようと強情を張っても、屈伏することはない。それは、(過去や現在の)多くの人々の言語であり、そのためにこうした多くの人々の思考や知識をその中に含んでいるようだ。それゆえ、私は個人的には予め全く知らなかったことを書くことができる。それは、言語が既にそうした思考のために形づくられていたために、[私が知らなくても]言語自身が知っていたことなのである。(S.408)

このエッセイの中に伏在している一つの要請は、言語が持っている、こうした、意志的な主体を越えた力を解放することである。「私」の意図どおりに言葉を操るのではなく、言葉自身が勝手に語り出すように仕向けることである。

ビクセルが挙げていた三つの例、酔っぱらいのおしゃべり・隣人との天気の話・恋人宛の手紙、これらはいずれも、不完全ではあるが、ある意味でこの要請に応えるものであった。つまり、これらの例においては、話し手(書き手)は、話されている当の話題には全く関与せずに、あたかも言葉が自ら語り出す原動力を供給するだけであるかのようなことからである。話し手には、話したい事柄が別にあるか、あるいは全くないかであるから、話されている事柄には話し手の意図が現前していないのである。そこでは、まるで「私」のいないところで、言葉だけが語っているかのような事態が起こっているのだ。

しかし、いずれにせよ、これらの例においては、「話し手の意図の不在」という事態は不完全なものにとどまる。というのも、当初話し手の意図していなかった事柄でも、それが一旦語り出されると、話し手はその事柄自身が要求する秩序に強制されて語り始めるものであるからだ。隣人と今日の天気について言葉を交わす場合、それらの言葉は「私」の「心」によって裏打ちされていないとはいえ、天気がテーマとして選択されるやいなや、話し手は自分の言葉がそのテーマに沿ったものであるように気を配らなければならない。だから、言葉が自ら語り出すためには、語り始める以前に話し手が何

も伝達しようとしていないことばかりでなく、語られている最中に、言葉が一貫性を持ったテーマに収斂していかないことも必要なのである。こうした、話題を可能な限り還元しようという努力は、ピクセルの内にはっきりと認められる。彼は創作する際に、例えば、現実を再現しようとはしない。

私が、紙に書きつけることができるのは現実そのものではなく、何かその現実について言えること、何かその現実に関して語れることに限られる。

私に興味があるのは、私が「机」という単語を書いた時に、紙の上に何が起こるかである。私は、この単語から、それが私に更に幾つかの単語をもたらしてくれること、それが文を誘発してくれることを期待する。この「机」という単語は、他の単語と共に紙の上で一つの相互の関係 (Konstellation) を形成することになる。〔「机」という〕対象は、後になると口実に過ぎなくなる。どんな対象でも、私に書くきっかけを与えてくれるなら、それでいいのである。(S.409)

だから、ピクセルが創作するとき、事柄よりも言葉が先行していく。描写すべき対象は存在せず、言葉の連鎖を触発するための最初の一撃として、何でもいから何かの対象が必要とされるだけだ。

「机」という対象が与えられると、机の客観的な描写が始まるのではなく、机について言い得ること、即ち、机についての人々の一般的な判断が引き出されてくるのである。同様の理由から、彼にはまた、何かの物語を語ることもできない。

私は、何かありきたりではないもの (Außergewöhnlichem) の目撃者であることはないし、ありきたりではないものを生み出す想像力も持っていない。

私は確かに書きたいとは思いが、ありきたりではないものを報告することはできない。(S.409f.)

彼は次のようにも言っている。

題材が大掛かりなものになればなるほど、それが書き手を強制する力 (Sein Diktat) も強くなる。ありきたりではない題材というものは、たいてい大掛かりなものだ。こうした題材が理解されるためには、普通より多くの分量が必要になる。

ありきたりの題材というものは、読者にもお馴染みである。その強制力は、形式的なものにとどまる。(S.411)

通常我々が語るに値すると考える珍しい出来事や、人々の興味を惹く物語というものは、それらに固有の秩序を備えている。それらを語るとなると、そうした秩序に適合させるために、言葉の自由な連

鎖が寸断されてしまう。ここには既に、彼が読者の日常的に出会う事柄しか扱わない理由の一端が示されている。

このように、ビクセルは、言葉が物語の秩序に従うことも、現実の秩序に従うことも回避しようとする。言葉に固有の力を解放するためには、言葉が何かについて語るのではなく、何物にも拘束されることなく、湧き出てくるままに自由に語らなければならない。しかし、ビクセルの場合、こうした要請が、アンドレ・ブルトン流の自動筆記といった極端な試みへと向かうことはない。

彼は他方で読者というものを常に念頭に置き、読むに値するもの、少なくとも相手を読み得るものを書こうとする。それは、言語のもつ統語規則に従い、テキストの構成に必要な意味上のまとまりいうものを尊重するということである。これが、このエッセイを貫くもう一つの要請である。

書かれたものは、常に誰か読者を念頭に置いている。(中略)

私は、読者のために書く。

書かれたものは、少なくとも誰か一人の読者にとって読むに値するものでなくてはならない。

(S.411)

ビクセルの創作活動は、これら二つの要請の間でバランスをとりながら行われる。言葉が、自由連想的に次々に引き出されてくるように努める一方で、様々な言語的慣習を配慮しなければならない。それは、とりわけ、テキストがテキストとしての形態を保つよう、少なくとも読者にとって意味上の結束性を持つものになるよう気を配ることである。テキストというものは、最初の一文が書かれた瞬間から、そうした結束性への配慮を要求するものだ。しかし、当然のことながら、こうしたテキストの論理は、自由な連想による言葉の展開と対立する。

書き手は、それゆえ一つの文が命じる様々な可能性に従うばかりでない。彼は、この文に背きながら書くこともあるだろうし、この文を避けながら書こうと試みることもあるだろう。こうした試みから、言葉の上に緊張 (sprachliche Spannung) が生じる。(S.410)

読者を想定したコミュニケーションであるということが、作品にテキストとしての外枠を与え、その枠内であるいはその枠に逆らって、言葉自身が語り出すのだ。すべてが成功裏に終わった場合、テキストは読むに値するものとして読者に受容される。しかし、そこでは言表が収斂していくような、いかなるテーマについても書かれていないはずなのだ。テキストという形式の強制力を除けば、書き手の意志を離れたところで、言語自身が語ったのだから。我々は上で、ビクセルにとっての文学が伝達目的を離れて純化されたコミュニケーション行為だと規定したが、それは、ここに述べた二つの矛盾

した要請を両立させようとする努力が最終的に取るはずの形態なのだ。それは、「何も伝達しないコミュニケーション」になるはずだ<22>。

3. 何も伝達しないコミュニケーション

もちろん、この「何も伝達しないコミュニケーション」という表現は、そもそもの始めから形容矛盾である。コミュニケーションが行われて、何も伝達されないなどということは、権利上も事実上も有り得ないことである。言葉を使う以上、それがどんなに小さな言葉の細片であろうと、何らかの意味を指示してしまうものなのだ。だから、上記の二つの要請に答えようというピクセルの試みは、始める以前から失敗を運命づけられている。結局、彼の作品として我々に委ねられているものは、こうした失敗の軌跡でしかない。しかし、それは、主体によって制御されない、言葉の持つ力を解放しようという努力と、読者にとって読解可能なものを書こうという努力との間の解消できない緊張状態として、我々に与えられているのである。

上で引用したエッセイは、「Milchmannsgeschichten」を出版してから4年後の1968年に発表されたものであるが、表題作がその最初の一文が引き起こした連想から書き始められたことからわかるように、エッセイで述べられている文章作法は、この短編集の創作を回顧しつつ書かれたものと考えることができる。また、このことは逆に、このエッセイでの文学的思索の、実作における反映を、この短編集に見出すことを許すものである。「Milchmannsgeschichten」において、登場人物がどこにでもいる語るに値しない人間に限られていたことや、「出来事」が生じないようにするための様々な配慮と思われていたものは、これまでの説明から明らかなように、小市民の日常性を表現するために行われていたのではなく、テキストが、強制力の強い、固有の秩序をもったテーマに支配されることを回避するための措置だったといえるだろう。従来解釈に従えば、この短編集は、小市民の日常性という「取るに足りないこと」をわざわざ伝達しようとしていたということになるが、我々はむしろ、言葉としてはより消極的になるが解釈としてはより積極的に、これらの作品は「何も」伝達しようとしなかったのだと言うことができる。そして、こうした解釈もまた、現に存在している作品に突き合わせれば近似値に過ぎないものだが、作品に現れているものの総和としての近似値ではなく、作品が漸近線を辿りながらも決してそこには到達することがないような近似値なのである。

注

<1> Bänziger, S.35ff. 詩集 „das ende der stadt“ と „Versuche über Gino“ という散文作品が

それである。

- <2> Bichsel, 1982, S.7.
- <3> Bänziger, S.9.
- <4> Bänziger, S.40ff. Burger, S.192ff. Meier, S144. Schafroth, S.72f. Wypijewska, S.94f.
また、Peter Bichsel: Auskunft für Leser, hrsg. von H. Hoven 所収の Otto F. Walter: Bemerkungen zum ersten Buch von Peter Bichsel (1964), S.9-12 と Marcel Reich-Ranicki: Vom verfehlten Leben (1964), S.14ff.
- <5> Schafroth, S.72.
- <6> こうした特徴は、それ自体、現代人の Kommunikationslosigkeit や Kontaktlosigkeit の表現としても解釈されてきた。Zobel, S.196f. Emminger, S.103ff.
- <7> Nayhauss, S.69. また、Wolter は、<Milchmannsgeschichten> 中の „Holzwolle“ という一篇を扱い、実際に語り手の連想の展開を追いながら作品を分析させている。
- <8> Bänziger, S.42. Burger, S.195.
- <9> Paul Watzlawick / Janet H. Beavin / Don D. Jackson: Menschliche Kommunikation, Bern/Stuttgart/Wien ³1972, S.56, zitiert nach Nayhauss, S.70.
- <10> Burger, S.193. Emminger, S.104. Meier, S.144. Reich-Ranicki, in: Peter Bichsel: Auskunft für Leser, hrsg. von H. Hoven, S.13.
- <11> Bichsel, 1964.
- <12> 以下、Bichsel, 1964 からの引用は、本文中にページ数だけを示す。
- <13> Bichsel, 1964, S.407.
- <14> Nayhauss, 1979.
- <15> 短いものなので、以下に全文を引用する。
- Erklärung:
- Am Morgen lag Schnee.
- Man hätte sich freuen können. Man hätte Schneehütten bauen können oder Schneemänner, man hätte sie als Wächter vor das Haus getürmt.
- Der Schnee ist tröstlich, das ist alles, was er ist— und er halte warm, sagt man, wenn man sich in ihn eingrabe.
- Aber er dringt in die Schuhe, blockiert die Autos, bringt Eisenbahnen zum Entgleisen und macht entlegene Dörfer einsam.
- <16> Nayhauss, S.72f.
- <17> Bichsel, 1968, S.411.

- <18> R. ヤーコブソン：『一般言語学』 川本茂雄監修、みすず書房（1973）1985, S.188.
- <19> Ebd. S.191.
- <20> Ebd.
- <21> Bichsel, 1982, S.10, 41.
- <22> 我々が、論述の途中で、対話者との接触を自律的な目的とした「表出の欲求」と呼んでいたものは、ビクセル自身に限って言えば、より正確には、コミュニケーションという形式を維持しつつ、その中で言葉の力を解放しようという欲求と呼ぶべきだろう。「表出の欲求」、「コミュニケーションのためのコミュニケーション」という表現は、どんな内容であれ語られさえすればそれで所期の目的が達せられたことになる酔っぱらい等の例には、なるほど相応しいものである。しかし、ビクセルにおいては、内容をできるだけ還元しようという要請も働いているので、その点で一線を画さなければならない。

Literaturverzeichnis

1. Primärliteratur:

Bichsel, Peter: Eigentlich möchte Frau Blum den Milchmann kennenlernen, Olten (1964)
¹⁷1989.

Bichsel, Peter: Die Geschichte soll auf dem Papier geschehn. In: Akzente 15 (1968), Heft 5,
 S.406-411.

Bichsel, Peter: Der Leser. Das Erzählen, Frankfurter Poetik-Vorlesungen, Frankfurt a.M.
 (1982) ⁵1989.

2. Sekundärliteratur:

Bänzinger, Hans: Peter Bichsel. Weg und Werk, Bern 1984.

Burger, Hermann: Die Geschichte soll auf dem Papier geschehen. In: H.B.: Ein Mann aus
 Wörtern, Frankfurt a.M. 1983, S.189-213.

Emminger, Eckhard: Literaturdidaktische Analyse der Kurzgeschichte „Die Tochter“ von Peter
 Bichsel. In: A. Weber und W. Seifert (Hrsg.): Literaturdidaktische Analysen, Freiburg
 1980, S.98-111.

- Graf, Hansjörg: Ein >zarter Empiriker<: Peter Bichsel. In: Merkur 24 (1970), Heft 8, S.788-789.
- Hoven, Herbert (Hrsg.): Peter Bichsel: Auskunft für Leser, Darmstadt/Neuwied 1984.
- Meier, Regula A.: Peter Bichsels Kurzprosa in <Eigentlich möchte Frau Blum den Milchmann kennenlernen>. In: Stefan Grunwald (Hrsg.): Theorie und Kritik, Bern 1974, S.141-148.
- Nayhauss, Hans-Christoph Graf v.: Peter Bichsels <Erklärung>. In: Literatur für Leser (1979), Heft 1, S.67-73.
- Schafroth, Heinz F.: Nachwort (zu „Stockwerke“). In: Peter Bichsel: Stockwerke, Stuttgart (1974) 1986, S.72-78.
- Wolter, Diemut E.: Zu Peter Bichsels Kurzgeschichte ‚Holzwolle‘. In: Der Deutschunterricht 23 (1971), Heft 1, S.18-20.
- Wypijewska, Hanna: Peter Bichsels kurze Prosa. In: Acta Universitatis Wratislaviensis 712, Germanica Wratislaviensia LV, Wrocław 1984, S.93-101.
- Zobel, Klaus: Peter Bichsel: San Salvador. In: K.Z.: Textanalysen. Eine Einführung in die Interpretation moderner Kurzprosa, Paderborn u.a. 1985, S.193-198.

(大学院博士課程)